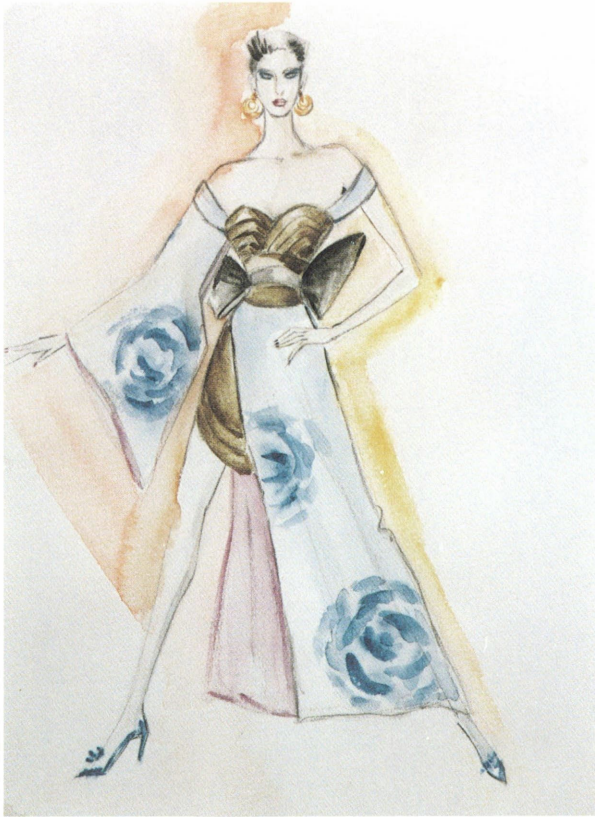




ゆかたのイラスト



一、きものアレンジデザイン



二、きものアレンジデザイン

美しいきもの

—日本のゆかた—

蘇 莉
Su Li

1. はじめに

近年来、ファッションこういう名詞は中国にもはいつて来ています。人々はできるだけ自分が美しくなりたいと思っている。しかし数十年間の経済、文化教育の封鎖による結果どのようになれば美しくなれるかということがまだよくわからないのです。私もそう思います。ファッションを勉強したいという夢を持って日本に様々な期待を持って来ました。

三年間いると色々なことを見て学んで感じました。幸運だったのは東京家政大学に研究生として入学することができ私の夢の実現がはじまりました。

2.

昨年の四月三日に、生田光子教授と一緒に結城に出かけました。生糸から、きぬの織り方、染め方など様々なことを見学して、きものについて非常に関心をおぼえました。見学のあと生田先生は「日本のきもの」はこのようになってるが、とても美しいものであるが現代では次の三つの課題があるように思います。

- 一、なぜ時間をかけて手袖ぎをするのか。
- 二、機械化した織り物と手袖ぎの「味わい」

の良さとの違い。

三、手袖ぎはなぜ高価になるのかなどを含めて他の国では理解できないことが多いと思うとの批評をいただきましたので、この点を研究テーマに持つために、住田先生のゆかたの講義と演習をはじめました。

ゆかたを一枚仕上げました。この間、京都にもいきました。“西陣”できものの染め方、描き方、織り方など見て、いろいろ仕上げることの技術より、手芸がとても印象に残りました。時間をかけ心もかけると思います。京都できもののショーを見ながら、日本の心の代表的なものを感じとりました。

日本は精神文化の国であります。少なくとも心の世界を大事にする民族性であると思います。私は三年間日本にいて、そのような感想を持つことができました。

日本における装身行為は縄文時代に遡る。襟を正し、折り目正しく自らの品性を高めるということ。

きものことは、衣服という意味にも用いられるが、通常洋服に対し、日本の衣服、つまり和服のことをいいます。デザインをあまりしないですがとくに和服の中でも長着をさすことが

多い。

きものを装いますと自然との一体感，すなわち自然を愛する心がでできます。生田先生と一緒に結城にいったとき，染める材料は桑，桐，梅，藍という植物であるということを見るとそのような感じができました。きものの柄にも四季折々の花鳥風月が配されたものが多いのもその良い例です。

きものは日本の気候，風土，土壌と合わせて考えてできたものです。脇の下に身八ツ口などという通気口を設け，寒暖の差で開閉を自由に調節できるような機能性を持っています。そのような衣類は，他にないでしょう。すべて気候風土に対応する知恵であり，同時に日本人の体型を美しくみせるためでもあります。

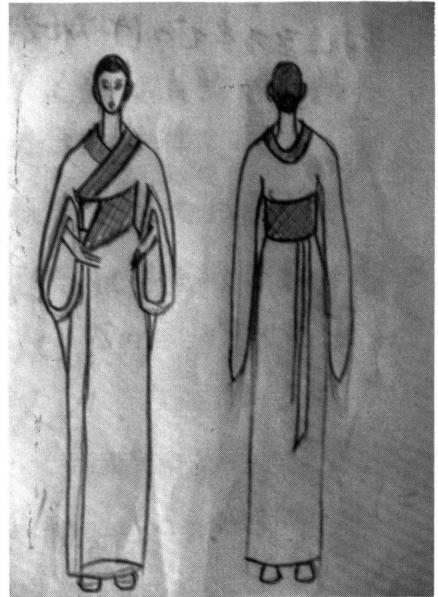
中国では，歴史的に夏商時代から蚕の糸もありました。糸から織物までを発展させて，衣服の種類も多くなりました。

色や柄や型など，人類は自然万物を観察し，それで文様や柄などを図案化して取り入れます。

中国の商時代は奴隷社会の時期で発見された出土の文物の中で奴隷主の衣服型が見られます。



図一



図二

図一で見せているのは，商代の奴隷主の服飾です。襟を交叉して，ウエストを帯で締めます。つぎの周という時代から発展された服飾が「冕」服というのです。

「呉」という時代で（春秋戦国時代）図二のような型ができました。これを見るとどうしてきもの形成する前は「呉服」というふうによばれていたかわかります。

“応神37年に帰化した阿知使主を呉に遣わし，縫工女を求め，中国の呉王は兄媛，弟媛，呉媛，穴織四工女を与えました”。日本の史記の中にも記されています。“呉服”ということばは呉の国からもたらされた衣服という意味になり，絹の衣服の総称となりました。柄のつかい方は盤竜，仙鶴，麒麟，獅子などがあります。現在は発展していろいろな模様ができました。伝統的なものより，日本の特徴のある模様も様々に見えます。

きもの美しさについて少々感想を述べます。ゆかたについてもできるだけ報告します。

ゆかたは昔、天皇が湯あみするときに用いた麻の湯帷子が略されたものといわれる。江戸時代の庶民生活中に銭湯風呂の風習が普及するにつれて、中形のほかにもめん紋りもあります。また綿じまのものもあります。また絹、縮緬のような贅沢なものまでふくまれる。日本の夏季の高温多湿の気候に適した衣服として和服の中でも特殊な情緒を持つ着物であります。はじめは湯あがり用として家庭の中で用いられたが材質及び模様によっては外出着として用いられるまでに発展しました。

かすりが地方的な庶民の工夫を伝えてきたのに対し、ゆかたはむしろ都会的なものでした。江戸の長板中型染め、尾張は有松のもめん紋りは、いずれも都会の需要を中心にしたものであります。

江戸時代でははじめは有松紋りが全盛。天宝頃から紺地にやや大型の花文を絞りました。博多紋りが流行したといえます。実はきびしい江戸時代は禁欲主義をもって大きな社会倫理とした時代で庶民はごく少数の色相をもって生活することしか許されなかったのであります。そこで庶民は唯一豊富な藍という染料によってできる限りのバリエーションを生みだすことに専念しました。その結果が多様なゆかたの文様となったのであります。でも今多く残っている江戸時代の染め型紙にはこったものが多い。麻のゆかたに華やかな文様がつけられていてこの頃はまた木綿の染めの中心は絞り染めであります。しかしかたびら類の型紙染めは容易にもめん地の染めに移行することができます。この麻のかたびら染めゆかた染めの技法がもめん地に移されて木綿のゆかたを成立させたのであります。文様を染めた麻かたびらの大衆化でありました。ふつうゆかたは袖が広袖にするがひとえの代用にする場合は袂を縫った。この場合の文様は京阪地区では男はこまかな藍小紋、女は秋草などの文様であったといえます。また有松紋りを用いるのは貧しい人たちに多かった。ほんとうの意味のゆかた、すなわち浴後にのみ使うもので

ありました。女ものの場合江戸時代では大柄の文様が多く使われたけれど京阪では少なかった。また絞りの場合はゆかた専用でひとえの代用にはできないとされたがただ“柳”絞りのみは一見したところしまものに見えるのでひとえの代用にしてよい習わしになっていました。また昼はゆかたで外出するものではなく麻か木綿のひとえものに限られたものであります。女は昼は紺のものを着て夜は白地の多いゆかたを着るのがよいといわれた。なぜならば夜には白地の方



図三 きものアレンジデザイン

が美しく見えるからというのであります。

今のゆかたは夏の着物に代表されます。白地に紺、紺地に白と、いかにも涼しげな色を使います。柄の使い方は小さい柄や大きい柄に対して中形ぐらいの柄が一番使われています。

ゆかたは純然たるふだん着ですから、素はだにさらっと着流し、素足にこまげたというのが最も適しています。

3. 反省とお礼

二年間に、担当の成田先生からいろいろ勉強指導いただきました。私達は一年間ぐらい日本語を勉強しましたが、すぐに大学の研修生になって、私本当に大変なことになったと思いました。一番大変なのは私達の先生になること。しかし成田先生は一言一言を教えてくださいまして、私達はわからないときに漢字と英語で良く説明してくださいました。住田先生は中国語もつけて教えてくださいました。私はとても感動しました。外国の研修生は生活研究所にはじめてなんです、植松所長と諸先生方は私に非常に親切にご指導を下さり、ありがとうございました。

最後に、担当の成田先生に、心から本当にありがとうございました。

参考文献

「服装大百科事典別巻資料集」

昭和44年3月20日 初版

昭和56年4月10日 増訂版

編纂 服装文化協会

発行所 文化出版局



図四 きものアレンジデザイン